

夢の物語とファンタジー

—— ようこそ大学の先生 ——

堀 竜 一

I 夢の物語と怪談

1 「夢十夜」と怪談

六年一組のみなさんこんにちは。ぼくは大学の堀竜一と申します。国語科で中学校や高校の国語の先生になる学生さんや、小学校の先生になって国語の授業をする学生さんを教えています。国語科の中でも専門は日本の近代文学です。国語の教材で言えば、文学教材、つまり物語、小説や詩の研究をしています。

今回初めて、小学生のみなさんに教室でお話する機会を頂きました。みなさんの興味を持てるお話ができればと思っています。きょうは「夢の物語とファンタジー」という題でお話をしたいと思います。みなさんは本を読むのが好きですか。どんな本がお気に入りでしょうか。ファンタジーが好きだという人はけっこういると思います。では、ファンタジーとは

何でしょうか。少し大きな一冊本の国語辞書には「幻想的な小説・童話」（『広辞苑』第五版）、あるいは「幻想的・夢幻的な文学作品」（『大辞林』第二版）とあります。やはり少し大きな一冊本の英語辞書では、もう少し詳しく「（怪奇・神秘・超自然などを扱った）幻想的作品、ファンタジー」（『小辞館 ランダムハウス英和大辞典』第二版）、あるいは「幻想的文学作品、（時に）空想科学小説（science fiction）」（『研究社 新英和大辞典』第五版）とあります。みなさんの読む物語、一般に児童文学と呼ばれる物語にはファンタジーとされるものが多いと思います。大人の読む小説の中でもファンタジーは大きな一つのジャンルとして認められているような気がします。ところが意外なことに、日本やアメリカなどの文学辞典、文学用語集の類を見ても、せいぜい先ほどの国語辞書や英和辞書の説明よりも少し詳しい程度で、ファンタジーが文学の一大ジャンルとして認められているとはとう

てい言えませんか。ところが映画やアニメの世界、みなさんの読む物語の世界ではブームと言ってもいいほどではないでしょうか。実は、ファンタジーの「幻想的な」という性質は文学そのものの性質であり、ある意味でファンタジーは文学の原型と言ってもいいでしょう。では、さっそくみなさんにまず二つの物語を読んでいただきます。これからプリントをお配りします。

挿絵のついている方が「第六夜」、裏は「第三夜」という題がついていますね。まず「第六夜」の方から読んでください。早く読み終わった人は、裏の「第三夜」の方も読んでみてください。

ずいぶん早くに読み終わった人もいますし、じっくり読んだ人もいましたね。どうでしたか。「第六夜」と「第三夜」、どちらがおもしろかったですか。「第三夜」の方が圧倒的に多いですね。これはどちらも夏目漱石の「夢十夜」という作品の中の二つの夢のお話です。夏目漱石というと、よく「明治の文豪」などと言われますね。プリントに集英社の『まんがこども大百科』から漱石の生涯を辿ったまんがを載せておきました。みなさんはどんな作品を読んだことがありますか。『吾輩は猫である』とか「坊ちゃん」は、小学生の必読書としてよくリストに挙げられています。『吾輩は猫である』はけっこう表現も難しく、またとても長い作品です。先ほどみなさんに読んでもらった「夢十夜」は、タイトルどおりの夢を集めたものです。「第六夜」は明治の現代（漱石の生

きていた時代です）に鎌倉時代の彫刻家（プリントの用語集に『集英社 まんがこども大百科』から「運慶」と「金剛力士像」を上げておきました。それによれば「仏師」というのですね）の運慶が現れ、仁王像を彫るという話です。どかが「夢」らしいのでしょうか。鎌倉時代の仏師（今風に言えば「芸術家」でしょう）が明治の現代に存在するという点と、完成した形がもとと木の中に埋まっていた、芸術家はただそれを掘り出すだけだという点が、夢らしい雰囲気を感じています。この「第六夜」は、ほかが高校の受験勉強をしている時に、国語の問題文で出会ったものです（たしか東京教育大学、いまの筑波大学の附属高校の問題でした）。とてもおもしろくて、母親に頼んで町の本屋さんで「文鳥」と一冊になってある角川文庫版の「夢十夜」を買って来てもらいました（当時、田舎の中学生だったばかりには、自分で町の本屋で本を選び、買うという習慣はありませんでした）。ぼくの郷里は長野県の長野市で、小さい頃からよく善光寺という大きなお寺に行きました。石畳の参道の途中に仁王門があり、大きな二つの仁王（後に、阿形と吽形という違う仁王だと知りました）が立っていました。お前が幼い頃、よくその大きな仁王像を見ては怖がって泣いたものだとか聞かされました。そんなこともあって、今でも「第六夜」には愛着を感じています。

先ほど聞いてみたら、「第六夜」よりも「第三夜」の方がおもしろかったという人の方が多かったですね。おもしろい

結果だと思えます。「第三夜」は、目のつぶれた気味の悪い自分の子どもを背負って、雨のそぼ降る田んぼ中の暗い道をとぼとぼと歩いて行く父親の話です。百年前に自分の子どもを鎮守の森の大きな杉の根っこところで殺したという記憶が突然よみがえるというのも、何とも恐い話で、まるで怪談のようです。本屋さんで小学生のコーナーを見てみると、「学校の怪談」のシリーズがたくさん並んでいます。なぜか人気があるようです。ここにこんな本を持って来てみました。水木しげる『カラー版 妖怪画談』『カラー版 続妖怪画談』『カラー版 幽霊画談』（いずれも岩波新書）。ほかが子どもの頃にテレビで「ゲゲゲの鬼太郎」というアニメ番組をやっていました。その作者です。何ともおどろおどろしい気味の悪い絵のアニメでした。みなさんの生まれるはるか昔のことなので、みなさんはご存じないのではないですか。知っている人もけっこういますね。今でもテレビでリバイバルか何かやっているのでしょうか。「妖怪画談」の中に「妖怪の有名な人たち」という章があって、こんな妖怪が挙がっています。「こなきじじい」、おんぶおばけです。ここではだっこしてありますが、赤ん坊のような、年寄りのようなグロテスクなおばけです。「火車」^{かしや}、「大入道」、それから「河童」もいます。「河童」については、昔からいろいろとおもしろい話があります（後で紹介するミヒヤエル・エンデの『はてしない物語』風に言えば、「けれどもこれは別の物語、いつかまた、別のときにはなすことにしよう。」）。「口裂け女」、これは新しい

おばけで、ほかが大学生の頃にはやったものらしいのですが、長い間知りませんでした。当時の小学生を恐怖におのかせたようです。ずいぶん昔ですが、みなさんも知っているのですか。学校の怪談といえば、「トイレの花子さん」が有名ですね。こちらの『幽霊画談』の方に出ています。それ以前からトイレ（便所）はおばけが出る場所として知られていました。これは後ほど触れます。さて、「第三夜」に戻ります。ここには江戸時代のさまざまな怪談の記憶が積み重なっています。先ほどのプリントにもあるとおり、漱石は一八六七年（明治元年が一八六八年ですから、その前年です）に東京の、今の早稲田大学のあたりで生まれました。まだまだ江戸時代の雰囲気そのものの中で成長するのですから、日常の身の回りに江戸時代の恐い話、不思議な話がいっぱいあったわけですね。「第三夜」の一つの柱は、「こんな晩」型と呼ばれる昔話だろうと思います。旅人を泊めてあげたその家の主人が、旅人がお金を持っていることを知って、旅人を殺しお金を奪う。その家は豊かになり、長い間生まれなかった子どもも生まれる。ところがその子は成長しても一言も言葉を話さないが、ある月の美しい晩に父親に「おしっこ」と初めて言葉を発する。大喜びで子どもをおしっこをさせに外に連れ出した父親に子どもが言うせりふ、「お前がおれを殺したのは、こんな晩だったな」。全国各地でさまざまな形で語り伝えられているようです。因果応報、つまり現世（あるいは過去世）でよい行いをすれば来世（あるいは現世）でよい報いがあり（今

では「報い」という言葉は、どちらかと言えば悪いニュアンスの言葉ではないでしょうか）、悪い行いをすれば悪い報いがある、という仏教の思想を表した物語と言えます。しかしこれ以外にもさまざまな恐怖・不思議の記憶が「第三夜」には流れ込んでいます。たとえば、先ほど紹介した「こなきじい」もそうです。「こなきじい」とは「児啼爺」ということです。山道で赤ん坊の泣き声がする。旅人が不思議に思っ
て抱き上げると、旅人にしがみついて離れなくなる。その赤ん坊は次第次第に重くなって、ついには何百キログラムにもなってしまう。これにもさまざまなヴァリエーションがあります。「第三夜」でも、自分の子どもなのに、「声は子供の声に相違ないが、言葉つきはまるで大人である。しかも対等だ」。まあ、お爺さんというほどではありませんが、父親の心の中はすべてお見通しです。そして、最後に父親が百年前のことを思い出すと同時に、「背中の子が急に石地蔵のように重くなった」というのです。「第三夜」の場合、この重さは罪の重さであると読むのが一般的ですが、逆にその赤ん坊が金のような宝物、恵みに変わったという昔話もあります。

2 江戸の怪談

漱石の「夢十夜」が本当に漱石の見た夢そのままなのかどうかという点は、議論のあるところです。みなさんもよく夢を見るでしょう。朝、起きがけに見ていた夢はなまなましく覚えてい
るものです（もともと、ぼくのように歳をとって来

ると、夢を見なくなったのではと思うほどほとんど忘れてしまっていますが）。では、その感触も含めて、言葉で書き表そう、言い表そうとするとどうでしょうか。夢は、それが何か深い意味を持つように思えば思えるほど、言葉で表現するのは困難です。書いてしまうと、何か大切なニュアンスが失われてしまう。また、頭で考えて書いても、作り物めいて、夢の雰囲気やうまく伝えられない。文学作品にはよく夢が描かれますが、夢らしく描くというのは、見たままそのままを描けばいいということではなく、実は大変な力量が必要なのです。ちよつと分かりにくいかもしれませんが、意識と無意識のバランスを取ることが大切です。この点で、夢の物語と昔話や怪談はよく似た構造をしています。それは後で話するとして、ここではみなさんに江戸時代の怪談を二つ紹介します。岩波文庫から上・中・下の三冊で出ている『江戸怪談集』という本に収められているものです。古文としてはごく簡単な文章ですが、みなさんはまだ古文を習っていないので、ぼくがかいつまんで筋を辿ることにします。まず「大石又之丞、地神の恵みにあひし事」です。関ヶ原の合戦があった頃のことです。天下分け目の戦いで徳川家康側が勝って、江戸に幕府が開かれる前後で、まだ人々の意識には中世の暗闇が潜んでいたかもしれません。大石又之丞という人は、文武両道に秀でた立派な侍であった。浪人をしていたが、出雲（今の島根県です）の殿様に出仕がかなう。屋敷を頂くが、その屋敷には「ばけ物」が現れ、住んでいる人をさらってし

まうという。又之丞は家族で引き移る前に、單身屋敷で一夜を過ごし、「ばけ物」の正体を見届けようという。武器を携え、学問をしていると、案の定、「夜半の頃」に背の丈二丈（というのは、約六メートル）ほどの「大坊主」が表の門をたたき、開けよという。「変化の物」なので、開けなくとも入ってくるはずなのに、ということでも門を開けると入って来て、「我は此の屋敷の乾の隅、書院さきに住む地神也」と言うのですね。挿絵がついていますが、左下の門の外の大男がそれです。「乾」、つまり北西という方角にも意味があると思いますが、ここで問題にしたいのは、「地神」という神様のことです。山や川や森や沼や道や、さらには人間の屋敷といった、あらゆる土地土地に住んでいて、その土地を守っている神様。又之丞が頂いた屋敷のこれまでの住人は昔から地神を粗末に扱ってきたので、祟りをなしてきたという。ところが、又之丞は、この屋敷にやって来たとき地神に礼拝をし、これからずっと鎮主の神としてお守りしようと願をかけた。それでうれしくなってきたというのです。地神は又之丞に子孫の繁盛を約束します。又之丞は「神慮にかなふ（神のみこころにかなった）侍」ということで、最初三百石取り（給料の額です）だったのが、五千石取りに取り立てられ、「家中ならびなき出頭人」となった。その後地神の言葉どおり地神の祠の前の松竹の所を掘り返してみると、黄金が出てきた。これで祠を建て、いよいよ敬うと、家も繁昌したという。

次に、簡単にプリントの裏の「万吉太夫、化け物の師匠に

なる事」という怪談を読んでみましょう。これは京都から大坂に落ちて行く売れない「申楽（注では「能楽の古称」となっています）」の役者の話。怪談とは言ってもコミカル（滑稽）な話です。旅の途中で日が暮れる。茶屋に泊めてくれと頼むと、いいけれどもここには「夜な夜な化け物来たりて、人を取」るので、夜は自分たちもここにはいないという。それでもいいということで、万吉太夫は泊まるのですが、「夜半の頃」（この出現時刻はまさしく先ほどの「地神」の話と一致します）川の向こうから人の渡ってくる音がする。それは「たけ七尺（二メートル十センチ以上）ゆたかなる坊主」でした。ここで万吉太夫の言いぐさがおもしろい。「いやいや、そんな化け方はないだろう。お前は未熟者だな」と。坊主はさぞびつくりしたことだろうと思います。「いったいあなた様はどなた様で、そのようなことをおっしゃるのでしょうか」とへりくだった感じですよ。そこで万吉太夫は、お前の方が上手なら自分の師匠としよう、もし下手なら弟子にしてみよう、化け比べを挑みます。万吉太夫は能の装束をかぶり鬼になって見せたり、女臍（女性）になって見せたりする。挿絵はその場面です。真ん中にいるのが坊主、左下が鬼の格好をしている万吉太夫。つづらの上に女の能面が見えています。坊主は両手を広げ、驚き入っているのでしょうか。坊主は降参し、万吉太夫を師匠と頼むことになりました。そして自分は「川向ひの榎の木の下に住むくさびら」だと正体を明かします。「くさびら」とはきのこのことです。きのこが化け物になる

というのは、長生きした猫や狐が化け物になったり、百年以上も使われ続けた身の周りの物が化け物になるというのと同類でしょうか。ここで万吉太夫は頓知（このコミカルな話ではこの表現がぴったりです）を働かせ、化け物の弱点（禁物）を聞き出します。日本や外国の昔話などにも知恵ある人間が鬼などの弱点を聞き出し、鬼を退治するというパターンはよくあります。おもしろいのは化け物の弱点が「三年になる味噌の煎じ汁」ということ、きのこだからでしょう。万吉太夫は自分は大きな鯛の浜焼きが苦手で、それを食べればそのまま死んでしまうと言います。これはもちろん嘘で、あまりのおいしさに死んでしまいそうというのです。その後、くさびらは三年になる味噌の煎じ汁で退治されてしまいましたが、万吉太夫は「大きな鯛の浜焼き」を口にする事ができましたでしょうか。

江戸時代には怪談集が数多く出版され、人々がこぞって読んだと言われています。本に限らず、ベストセラーを真似て似たような趣向のものが次から次へと出版されたり、製造・販売されるといっては今も変わりません。膨大な数の中から、代表的なものをごく一部抜粋して三冊にまとめたものが岩波文庫版『江戸怪談集』です。先ほどの二つの怪談とともに『諸国百物語』という怪談集に収められたものです。『諸国百物語』という形式はよくある形で、全国津浦浦の不思議な話、怪奇な話を百集めたものということです。「百」という数は「夢十夜」第三夜にも「百年前」という形で出ていましたが、こ

んな意味があります。夜、人が集まり火をともして輪になって座る。何か恐い話をしようと、一人ずつ話をして行く。百番目の話をし終わったところで、フツとその灯火（台の上に立てた蠟燭のようなものを想像するといいでしょう）を消すと、お化けが現れる。この「百」という数にはもつといういろと意味があるのでしょう。ともかく、なぜ江戸時代には怪談がこれほどまでに膨大に書かれた（あるいは語られた）のか。岩波文庫の解説では、これらの物語は、「江戸時代初期の人々の心の深層にあつて、再発見していった異界」だとして、内容的に大きく（一）唱導仏教系怪談、（二）中国小説系怪談、（三）民俗系怪談の三つに分類しています（高田衛、岩波文庫版『江戸怪談集』（中）「解説」）。この三つの分類については、いささか難しいのでここでは詳しく触れませんが、怪談にはそれまでのさまざまな物語の記憶なり論理なりが流れこんでいるという点が重要です。

3 異界と『千と千尋の神隠し』

では、江戸時代初期の人々の心の奥底の闇の領域にはどのような「異界」が広がっていたのでしょうか。そこは不気味な化け物がうようよと跳梁している世界なのですが、「化け物」あるいは「お化け」というのは、少し曖昧な言い方です。お化けに関する近代の研究史を辿ってみるのは、それはそれで興味深いのですが、ここでは簡単に、諏訪春雄という人の『日本の幽霊』（岩波新書）という本によって整理してみます。

用語集のプリントの裏の右下を見てください。まず、「お化け」は「妖怪」と「幽霊」とに分類されます。先ほどの水木しげるさんの『妖怪画談』、『幽霊画談』というのも、この分類に従っています。「幽霊」の方から考えたらすつきりするかもしれません。幽霊は、特に怨念とか心残りとかいったマイナスの感情を抱いて死に、「他界」という死後の世界、死者の国に行ってしまった人が、その感情のあまりの強さに人間の姿のまま（幽霊には足がないとされていますが）現世（生者の世界）に戻って来て（「死に切れない」とよく言います）、その感情を引き起こした相手をどこまでも追いかけて回し、時に取り憑いて呪ったりもするということです。古来、日本人は「他界」（死者の国）の場所として、大きくわけて天上・山中・地下・海上（中）の四つを考えたといえます。死後の世界のイメージは文学や絵画によく描かれ、この主題もとてもおもしろいのですが、「けれどもこれは別の物語、いつかまた、別のときにはなすことにしよう」。

それに対して「妖怪」は、特定の相手に対して出現するのではなく、特定の場所に出現する、得体の知れない、時にとほうもない力でもって人間に害を及ぼす存在と言ったらいでしょうか。先ほど紹介した江戸の怪談「大石又之丞、地神の恵みにあひし事」に登場する「地神」は、屋敷の敷地に住みついた土地の精霊ですし、「万吉太夫、化け物の師匠になる事」に登場する「くさびら」の化け物も、京都から大坂へ下る途中の川のほとりの茶屋に出現する、といった具合に土

地に結びついているという点で「妖怪」と言ってもいいかもしれません。柳田国男という人によれば、妖怪とは、もともとその土地で神様として崇められていたものが、その土地に新たに入って来て、その土地を支配する強い力を持った勢力、権力によって土地から追い出され、よその土地から土地へと流浪するうちに次第に落ちぶれていったなれの果てといえます。プリントに二つの点線の円が同心円になっている図がありますね。真ん中に「村」があつてその外側に「異界」が広がる。「村」は権力の支配の及んでいる範囲、「村」の支配の及んでいない範囲が「異界」です。「妖怪」は「村」から「異界」へと追放された存在です。「村」と「異界」との間にはつきりとした境界があるわけではありません。「村」の中心から周縁（端）に行けば行くほど「村」の支配の力が弱まり、「村」と「異界」の境界線は勢力争いの力関係次第で外に広がったり、内に縮まったりします。

この夏に『千と千尋の神隠し』という映画がありましたね。ブームになり、今でもやっていますが、観に行った人はどれくらいいますか。けっこういますね。ほくも、みなさんにファンタジーの話をすること、夏休みの終わり頃になって、家族で観に行きました。主人公の千尋という女の子は十歳ということなので、五年生くらいでしょうか。物語は千尋が転校してくるところから始まりますね。近道をしようとしてお父さんの運転する車が、変な道に迷い込んでしまう。石を組んだトンネルの前に車止めがあり、お父さん、お母さん

と千尋は車から降りてトンネルの中に入って行く。千尋はいやがりますが、何かを感じていたのでしょうか。この『千と千尋の神隠し』という映画の中では、いくつもの境界線が設定されています。境界線とは、こちらの世界とあちらの世界を隔てている境のしるしです。その境界線を乗り越えることで物語は始まり、展開して行きます。そもそも「転校」ということ自体、こちらの世界からあちらの世界への移動です。十歳という年齢にしても、みなさんはその年齢をちよつと過ぎたところにいるわけですが、人生の発達段階の一つの境目と言えるでしょう。トンネルを抜ける、よく知られた川端康成の『雪国』の書き出しもそうですね。三人はひろびろとした原っぱをのぼって、小川を越え、誰もいない廃れた町に出くわす。テーマパークの名残という設定もいろいろと考えられると思います。過去の時間、あるいは捨てられた空間、そこは紛れもない「異界」です。千尋のお父さんとお母さんは思いもかけない姿に変わってしまいましたが、ちよつと夕暮れ時、言うまでもなく、昼と夜の境界です。千尋は一人とり残されますが、導かれて太鼓橋のような広く大きな木の橋を渡って「油屋」という何層にもそびえ立つ巨大な温泉旅館、湯屋に入り込みます。この映画のパンフレットの絵を御覧ください。温泉地のけばけらしい、人を浮き浮きとさせる旅館の雰囲気、が実によく出ています。温泉旅館という空間もやはり非日常の世界なのでしょう。また、橋は典型的な境界線を乗り越える通路です。その湯屋には夜になると、日本全国か

ら疲れを癒すためにさまざまな神様たちがやって来ます。千尋はそこで働くことになります。湯屋にやってくる神様たち。ちよつと小さくて見にくいのですが、ここにいろいろと出ています。「おしらさま」、大根の神様だというのですね、「春日さま」「牛鬼」「オオトリさま」、ヒヨコの神様だということです、こんな神様がいるのでしょうか。それから、秋田のなまはげでしょうが、「おなまさま」。中でも印象的なのは、この「オクサレさま」。ヘドロのようで、悪臭ぶんぶん、何とも気持ちが悪くなりそうです。ところが、これは汚れた河の神様だということです。パンフレットの中で宮崎駿監督が語っていますが、高度経済成長期にゴミを捨てられたり、汚水をたれ流されたりして、汚れに汚れてしまった日本の河の象徴のようです。オクサレさまがいつきよにゴミを吐き出す場面がありますが、ゴミというゴミは何でも、オンボロ自転車まで吐き出します。そして、浄化され、翁の面、白蛇の胴体の河の神様に戻って高笑いをしながら飛び去って行きます。現代の日本全国の神様たちは、人間があまりに土地を汚染したり、破壊したり、我が者顔をして傍若無人にのさばるものだから、すっかり疲れてしまつて、保養の必要があるわけですね。しかしこれは何も今始まつたことではなく、「大石又之丞」の「地神」の時代から変わっていないようです。

Ⅱ 夢の構造とファンタジー

1 ユング心理学と夢解釈

江戸の怪談が「江戸時代初期の人々の心の深層にあって、再発見していった異界」だとする説を先に紹介しましたが、ここでユング心理学という心理学の考え方に基づいて「異界」について考えてみましょう。用語集のプリントに『集英社まんがこども大百科』の「ユング」の項目と、ユング心理学の元になった「フロイト」の項目を上げておきました。ごく簡単にここで取り上げてみたいのは、ユングが考えた無意識の構造と、「元型（アーキタイプ）」についてです。プリントの裏の、「異界」「他界」の図の上の図を見てください。「意識」は氷山の一角、その表層のほんの一部で、水面の下に大きな領域が広がっています。「意識」に比較的近い領域、ここはすでに水面下ですが、「個人的無意識」で、まだ一人一人の個性が残っている部分と言ったらいでしょうか。さらにその下に「普遍的無意識」（「集合的無意識」とも言われます）の層が底なしに広がっています。怪談だけでなく、神話や昔話、おとぎ話といった昔から語り継がれて来た物語は夢とよく似ていて、この大勢の人、集団の心の深層の「普遍的無意識」が投影されているといえます。先ほどの「村」「異界」の図で言えば、「村」は意識の明るみの部分、「異界」は「無意識」の暗闇の部分ということになるでしょう。その「異界」の物語をユングは「元型（アーキタイプ）」という仮説を用

いて説明します。これはある役割を果たす登場人物のようなもので、物語によってさまざまな姿を取りますが、果たす役割は同じと考えられます。図のプリントの左側に代表的な「元型（アーキタイプ）」を挙げておきました（秋山さと子『夢診断』講談社現代新書）。いくつか見ておきましょう。「シャドウ」、「明るい意識化された自分の反面に隠されている人格の影の部分」、自分では認めたくないもう一人の自分、何か嫌だなあとないじめない相手とか邪魔者として夢に現れます。ユング心理学で解釈すると、漱石の「夢十夜」の第三夜の目のつぶれた小僧は、漱石のシャドウ、それも個人の罪の意識を表すシャドウというだけでなく、人類が遙か昔から積み重ねて来た罪・ケガレそのものを表すシャドウだといえます。怪談が個人だけでなく集団の心の深層の暗黒面の投影だとすれば、この「シャドウ」というアーキタイプでずいぶん説明がつくような気がします。次に、「アニマ」「アニムス」。「アニマ」は、「男性の無意識の中に住む異性」で、「アニムス」の方は、「女性の無意識の中にひそんでいる男性的なもの」ということで、憧れの異性といったものでしょう。ヨーロッパの昔話、現代ならデイズニーの物語などによく登場する白馬に乗った王子さまなどというのは、さしずめ「アニムス」と考えられるでしょう。『千と千尋の神隠し』に「白」という青年が登場し、「千尋」^{せん}「千」を守ってくれようとしています。しかし「白」が傷ついてからは、今度は「千」が「白」を助けるために勇敢にも不思議な電車に乗って、「白」を傷つけ

た「錢婆^{ぜにば}」のところに çık かけて行きます。おそらく「白」は「千尋^{せんじん}」にとつての「アニメス」にあたるでしょう。「アニメス」をなかだちにして「千尋^{せんじん}」は精神的に成長して行きます。ここでついでに触れておけば、竜に姿を変えた「白」が「千尋^{せんじん}」を背中に乗せて飛ぶ場面があり、興味深く思われます。エンデの『はてしない物語』でも、英雄のアトレーユは幸いの竜フッフルに乗ってファンタジーエンの国を飛翔します。竜は昔からさまざまな物語に登場して来た想像上の生き物ですが、特にファンタジーとは切っても切り離せません。竜（ドラゴン）は、元型としては一面では次に紹介する「太母（グレート・マザー）」と考えられるようですが、人を乗せて飛翔する竜は「アニメス」の「ロゴス的なもの（力、言葉、行為、意味、決断力）」、つまり人に大いなる力や知恵を与える存在によく当てはまるように思えます。他にもさまざまな想像上の生き物、幻獣がいます。ケンタウロス（半人半馬獣）、ユニコーン（一角獣）、フェニックス（不死鳥）、トロール（北欧伝説で、洞穴などの隠れ処に住む巨人、いたずら好きな小人）『小学館 ランダムハウス英和大辞典』第二版）、これらは『ハリー・ポッター』シリーズでおなじみですね。スフィンクス（女面獅子身、これもよく知られた幻獣ですが、エンデの『はてしない物語』にも出て来ます（これも、「けれどもこれは別の物語、いつかまた、別のときにはなすことにしよう。」です）。「太母（グレート・マザー）」、これはよく歴史の教科書の最初の方で、遺跡など

から発掘されたお腹の大きな女性の土偶に、古代人が大地の豊饒を祈つてまつたというような説明がつけられたりしますが、まさしくそれに象徴される、「あらゆるものを育てる母なるもののイメージ」です。もつとも、「山姥」「老婆」のように「あらゆるものを呑みこんでしまう」という恐ろしい一面も持っているわけですが。もう一つだけ説明しておきます。「老賢人（オールド・ワイズ・マン）」、「知恵」の象徴とも言いますが、これは「悠々自適の仙人」というのがびつたりです。エンデの『モモ』に、マイスター・ホラという、時間を司る老人が登場します。その使いが亀というのもおもしろい設定ですが、マイスター・ホラは時間泥棒の灰色の男達からモモを守るだけでなく、知恵を授けます。ただしモモは、自分の行動で時間泥棒達をやっつけなければならぬのです。

2 夢とファンタジー——小川未明「眠い町」

次に、小川未明の「眠い町」という短い作品を読んでもらうことにします。小川未明は上越出身の人で、日本近代の古典的な童話作家の一人です。みなさんはどんな作品を読んだことがありますか。そうですね、「赤い蠟燭と人魚」は有名ですね。とても暗い作品ですが、これから読んでもらう「眠い町」はどうでしょうか。では、まず読んでみてください。奇妙な呼び名ですが「ケー」と仮に呼ばれている少年が「この世界」を旅行し、ある不思議な町を訪れる。「この世界」

という表現も奇妙ですね。おそらく「ケー」は「あの世界」から、語り手あるいは作者の住む「この世界」に旅して来た「異人」なのです。今、「異人」と言いました。「あの世界」という表現は作品には出てきませんが、「この世界」というからには「あの世界」が想定されているはずです。しかも、この二つの世界の関係は、一見先に見た「現世」と「他界」との関係のように思われますが、「ケー」は生命感あふれる少年です。死の世界からやって来たとは思えません。「ケー」は「異界」からやって来たのではないのでしょうか。それで「異人」と言ったわけですが、そんな「ケー」が「この世界」の様々な町を旅する、その一つが「眠い町」というわけです。「なんとなく活気がない。また音ひとつ聞こえてこない寂然とした町」です。プリントの裏に川上四郎という人が描いた挿絵があります。ランドセルのようなものをしょって座っているのが「ケー」、もう一人の人は「じいさん」ですね。町並みは廃墟のようにすっかりボロボロです。まるで死の世界のようです。「この世界」にも様々な町があるのですね。この町を通る旅人はみな身体に疲れを覚え、眠くなってしまう。「ケー」は決して眠るまいと思っているのですが、案の定眠気に耐えられず、眠ってしまふ。目が覚めると、破れた洋服を着て袋をかついだ「じいさん」が目の前に立っています。目が覚めるといふよりは、むしろ「ケー」は眠りの、あるいは夢、無意識、心のと言つていいかもしれません、深みに入って行っているのではないのでしょうか。夢や無意識の深み

にあらわれる人物というと、ユング心理学的に言えば、「元型（アーキタイプ）」と考えられます。「じいさん」は「老賢人（オールド・ワイズ・マン）」の典型的な姿です。「じいさん」はこの眠い町を建てた町の主で、「ケー」に頼みがあると言います。自分はこの世界に昔から住んでいるが、どこから新しい人間がやってきて領土を奪ってしまった。そしてすこしの休息もなく、鉄道を敷いたり、汽船を走らせたり、電信をかけたりにしている。このままでは昔から美しい山や森林や花の咲く野原はすっかり砂漠に変わってしまうだろう。そこで、世界を歩いて回り、人間に疲れを覚えさせ、休息をとらせるよう、疲労の砂漠から持ってきた疲労の砂をまいてほしい……。奇妙な頼みですが、これはこんにちのみなさんの身の回りの環境、地球環境の抱えている大きな問題に通じるところがあると感じた人もけっこういたのではないですか。「眠い町」は大正三年、つまり今から九十年近くも前に書かれた作品です。そんな前から環境破壊の問題が意識されていたというのは驚きです。「ケー」はアルプス山中や、繁華な雑踏をきわめた都会などを歩いてまわって、砂をかけます。しまいに砂がなくなり、「じいさん」の言いつけどおり「眠い町」に戻ってくると、かつての「眠い町」は跡形もなく、そこは休み無く活動する大都会に変わっていた。「じいさん」はどこへ行ってしまったのか。これも考えてみるとおもしろい問題です。「ケー」は無意識の深く広大な世界を旅して歩き、最後に意識の表層に浮かび上がって来たということでしょう

か。常に死に絶えたような休息がいいとは思えませんが、休むことのない活動というのは、機械の特性です。もしかしたらロボットにも休息が必要かもしれませんが、まして人間、しかもこれからどんな成長して変わっていくみなさんのような子どもには自然と調和する深い体験としての休息が次の活動の源になるのかもしれない。しかし子どもが成長につながる深い体験を自分一人するのはなかなか困難です。その導き手が「老賢人（オールド・ワイズ・マン）」、ここでは「じいさん」です。砂がなくなったら帰ってこい、そうすればこの国の皇子^{みぎし}にしてやる、というのは、何も「ケー」の名譽欲を刺激しているわけではないでしょう。むしろ「ケー」は「じいさん」の後継者に指名されたと考えられるのではないでしょう。か。「ケー」は「じいさん」に導かれ、手助けされて世界を旅して歩きましたが、いよいよこれから自分一人で困難な課題に立ち向かわなければならぬ、逆に言えば、何とか自分一人で困難な課題に立ち向かうだけの力を「じいさん」の導きにより身につけた、成長したとも言えます。

3 冒険と心の旅、死と再生

今日のお話の最初に、「ファンタジー」というのは定義が難しいと言いましたが、それにも関わらずここに、「ファンタジー」は一種のブームのようです。今、世界的な大ベストセラーになっているという『ハリー・ポッター』シリーズも（日本語訳では最近第三巻が出たところですが、冬休みに

は映画もやるそうですね）ファンタジーと見なされています。魔法学校に入ったハリー・ポッターが友人と出会い、悪と闘い、成長して行くという一種の学園ものと言えるでしょう。第一巻の『ハリー・ポッターと賢者の石』（静山社）で、主人公のハリーは十一歳の誕生日にホグワーツという魔法学校からの入学許可証を受け取ります（と言って、それ自体が困難との闘いの上ですが）。この十一歳という年齢は、『千と千尋の神隠し』の「千尋」の年齢ととても近いし、みなさんとはほぼ同世代ですね。「ファンタジー」は「怪奇・神秘・超自然などを扱った不思議な話、幻想的な物語」と言えますが、やはり「冒険」という表現がぴったり来ます。「冒険」は字のとおり、「危険を冒してあることをする」という意味、英語では「アドベンチャー」です。危険、しかも、ときに死ぬのではないかと思われるような危険が伴いますが、それだけの危険を冒すに値する行為だからこそ、それを乗り越えることで主人公は大きく成長して行きます。やはりみなさんのような世代に特徴的な物語なのだと思います。よくは個人的には、さまざまな文学ジャンルの中でSF的な物語が好きです。冒険の領域が宇宙空間にまで広がっている、しかも未知の不可解な暗黒が至る所にあり、思いがけない出来事の連続です。それはまさにわれわれの心の領域と同じです。英語辞書の「ファンタジー」の定義の一つに、「（時に）空想科学小説（science fiction）」とありましたが、そのとおりだと思います。

さて、今日の話のしめくりに、ほかがみなさんにぜひ読んでもらいたいおすすめファンタジーを御紹介します。ミヒヤエル・エンデの『はてしない物語』（岩波書店）です。この本ですが、読んだことのある人はいますか。あまりいせんね。これは内容的にもなかなかこった物語ですが、装幀もこっています。ここに来る前に、すぐ近くの長岡市中央図書館の子どもの本コーナーをのぞいてみたら、一冊この本を見つけました。ボロボロになるまで読みこまれていました。書き出しの部分をプリントに作っておきました。裏に本の奥付と絵があります。奥付を見てみると、「中学生以上」と対象年齢が示されています。先ほどこよと触れた『モモ』の方は「小学五、六年以上」となっていて、まさに今のみなさんにぴったりですが、『はてしない物語』の方も内容は非常におもしろく、翻訳もなかなかこなれていて読みやすいので、みなさんもぐいぐい読んでしまうのではないでしょうか。まず作者のエンデについてですが、『集英社 まんがこども大百科』にも載っていました。しかも写真付きです。五、六年前に亡くなりました。エンデのお父さんはシュールレアリスム（超現実主義）と言って、幻想的な上にも幻想的な、つまりファンタジー的な絵を描く画家でした。たとえばこの表紙のこんな不思議な絵です。暁か夕べかの茜色の空を半円の弧を描いて飛んでいる椅子、そこにいずれもきちんと背広を着ているのに裸足で座っている三人の人物（『エンデ父子展 エトガーからミヒヤエルへ——ファンタジーの継承』。ミ

ヒヤエル自身はもともと演劇志望で、脚本から文学の世界に転じたわけですが、絵心もあったのでしよう、『モモ』の表紙のこの絵や本の中の挿絵も描いています。『はてしない物語』の装幀も手がけようとしたのでしようか。挿絵がいくつに残っています。プリントの裏の「登場人物のスケッチ」もそうです。ところで、『モモ』も映画化されましたが、つるりとした頭の時間泥棒たちがせわしなくスパスパと時間の花から作った煙草を吸う場面が印象的でした。『はてしない物語』もこれまで三度映画化されています。ここにパンフレットを持って来たのは『ネバーエンディングストーリー 第2章』（一九九〇年二月、ワーナー・ブラザーズ）、二度目のものです。それからこちらはDVDですが、『ネバーエンディングストーリー 3』（一九九四年二月、シネボックス、発売「東芝」）です。近々一と二もDVDで出るようです。同じ原作から三回も映画化されるというのも珍しいのではないのでしょうか。ここで映像をお見せできればいいのですが、残念です。

さて、本の方に戻ります。ちよつと見にくいと思いますが、このあかがね色（臙脂色）と言ってもいいでしょうか）の布の表紙、これだけでも立派な装幀の本です。四角の中に縦長の楕円があって、その真ん中に「はてしない物語」と書いてあります。よく見ると、四角の背景は右と左で分割されていて、右は暗く、左は明るく光っています。さらに楕円はよく見ると、真上と真下の所で連結されていて、連結部は少しふくら

んでいます。実は、この装幀の本は主人公（と言っているでしょう）のバスチアンが物語の中で手に取って読む本なのです。バスチアンも物語の冒頭にあるように、「十か十一くらい背の低い太った少年」です。この年齢はやはり意味があるのでしよう。「灰色の、冷たい十一月の朝」、「外はどしゃ降り」です。バスチアンがある古本屋のガラス戸を開けて、中に入るところからこの長い（それこそ「はてしない」）物語は始まります。物語の書き出しのページを見てください。上の四角い枠の中に変な字が並んでいますね。鏡文字です。これはその古本屋の中からガラス戸を通して外を眺めている店主の目に映っている字です。「古本屋／カール・コンラート・コレアンダー」（ドイツ語の名前で、イニシャルはK・K・Kです。バスチアンは「バスチアン・バルタザール・ブックス」で、B・B・Bです）。主は「かみつきぐせのあるブルドックを思わせ」る無愛想で不親かな、子ども嫌いの大人です。バスチアンはおどおどとしています。バスチアンは、この朝も登校時に同級生たちからいじめられ、逃げるようにしてこの店に入ってしまう。当然歓迎されません。店主のコレアンダー氏が電話を受けに奥に入っているときに、ふと目にとまった本、それがこの本で、バスチアンは衝動的に言うか、万引きをしてしまいます。バスチアンは本を大事に鞆に入れ、学校まで行くには行きますが、誰にも見つからないように、埃だらけの薄暗い屋根裏部屋に入り込み、そこでこの本に読みふけります。バスチアンが読んでいる本の物

語と、物語を読んでいるバスチアンの姿を語る物語が交互に繰り返されるといって、大変手の込んだ構成になっています。コピーではわかりませんが、バスチアンが読んでいる本の物語の方は薄い緑色の活字、バスチアンの行動を語る部分は、この表紙と同じあかがね色の活字です。午前中の授業、お昼、午後の授業、下校と時間はどんどん過ぎて行きます。バスチアンは物語の世界に引き込まれ、時の経つのも、自分が盗みをしたのも、学校を無断欠席していることも、気になりません。本好きの子どもとはそんなものでしょう。ひとたび物語の広大な世界に命がけの冒険の旅に出ると、容易には戻って来られません。バスチアンは初めは、みなさんがテレビのアニメか何かを見るように、熱中しながらも、物語の読者として（そばでただ見ているだけの人のことを「傍観者」というのですが）、物語の外側にいます。しかし次第に物語の世界からの呼びかけの声に気づくことになります。この長い物語は大きく二部に分けることができます。第一部では読者、傍観者であったバスチアンが、第二部では自分自身まさしく物語の登場人物の一人として、それも主人公なのですが、さまざまな冒険を経験します。そのバスチアンが読んでいる物語の世界、バスチアンが入りこむことになる世界、それは「ファンタジーエンの国」と呼ばれています。「幼おきなころの君」という女王様が統治している国です。ところが、「幼おきなころの君」は病に伏し、「虚無」が辺境から急速にこの国を侵蝕し始めているというのです。どんどん国の領土が消えて行きます。

白羽の矢を立てられたアトレューユという十歳ぐらいの（ほぼバスチアンと同年齢です）少年の勇士が、ファンタジーエンの国を救うために大いなる探索の旅に出ます。「ファンタジーエンの国」というのは、「ファンタジーの国」と言ってもいいかもしれません。読者が物語を読む時にだけ存在する国。とすると、本離れ、読書離れと言われる現代では、「ファンタジーエンの国」が次から次へと侵蝕されて行つて、しまいには滅亡してしまうのは必然です。バスチアンは本好き、空想癖の強い内向的な少年です。バスチアンが、ファンタジーエンの国の物語を生きたことで救い主にならなければなりません。ファンタジーエンの国を舞台にさまざまな奇怪な生き物が登場し、さまざまな不思議な物語が繰り広げられます。それは読んでのお楽しみとしておきましょう。

さて、最後にもう一度本の装幀に戻ります。もう一度よくこのあかがね色の布の表紙を見てみると、この輪は実は二匹の蛇がお互いにお互いのしっぽをくわえ込んでいる紋様なのです。これはヨーロッパでは昔からよく描かれてきたウロボロスという、これもまた幻獣の図です。正確に言えば、ウロボロスは自分の尾を呑み込む蛇ですから、これはその変形です。なぜ二匹の蛇か。四角い枠の左側が薄いあかがね色、右側が濃いあかがね色と、色の濃さが違っていますが、これは昼と夜を表しています。これは二つの世界、昼と夜、意識と無意識、現実と空想、等々を統合した世界の全体を表しているのでしょうか。円の形もやはり全体とか完全の象徴です。

この二匹の蛇は、長い物語の最後にバスチアンがファンタジーエンから現実の世界に戻る出口、あるいは入口に位置する泉、これは『モモ』の世界になぞらえて言えば時間の流れの始まり、つまり世界の根元と考えられますが、そこで出会うものです。二つの、あるいはもっと多くのかもしれないが、もろもろの世界は根元において統合されなければなりません。読者が登場人物たちと協力して物語を作り出して行く、そしてその物語がまた現実の読者を変えて行く、その絶えざる循環、これは円・輪ですね、それゆえに「はてしない」なのでしょう。それがこの物語の構造です。ある世界から別の世界、つまり異界へと旅をすることで古い自分が死に、新しい自分へと甦るという死と再生を象徴的に体験することが、ファンタジーの読書という心の旅の深い意味なのではないでしょうか。宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』のジヨバンニの旅も宇宙空間にまで世界を広げ描いた物語だと思えます。本を読むということの深い意味について、実にいろいろと考えさせてくれる『はてしない物語』ともどもぜひお読みください。すっかり話が長くなってしまいました。これでほとんどの話は終わりにします。最後までつき合ってくれてありがとうございます。

以上は、今年度初めて附属長岡小学校から教育人間科学部の教員全員に、「ようこそ大学の先生」という趣旨で、子どもたちに話をしてほしいという依頼があり、それに応えて二

〇〇一年九月二十一日の三時間目と四時間目に附属長岡小学校六年一組の子どもの前で話した内容をほぼ復元し、多少加筆したものである。当初、ワークシopp的な参加型の授業ができないものかとも考えたが、当日は結局九十分間まるまる、休み時間もとらず、子どもたちに作品を読んでもらい、駆け足で講演のように話をするというような形になってしまった。はたして子どもたちが話を聞いて本に興味を持ってくれただろうか。もう少し子どもたちの感想なり意見なりを聞きたいということで、担任の先生にお願いして、後日「おすすめファンタジー」という課題で書いて送ってもらった。以下に、その御礼の葉書を掲載しておく。最後に、話の機会を与えてくださった附属長岡小学校、六年一組のみなさん、担任の村山宏樹先生に御礼申し上げる。

六年一組のみなさん、村山宏樹先生。先日はクラスにお邪魔し、みなさんに話を聞いていただき、たいへんいい経験ができたと思っています。またこのたびは「おすすめ読書」の作文を送ってください、ありがとうございます。みなさんが、本をワクワクしながら読んでいる様子がよく伝わってきます。懐かしい本もありましたが、みなさんのおすすめの本をぜひ読んでみたくなりました。クラスにお邪魔したときに、ハリー・ポッターの本を机の上に出している人が何人かいましたね。今回も、何人もの人が紹介してくれました。ハリー・ポッターの本もぐいぐい引き込まれますね。ほくも、第三巻

まで熱中して読んだら、もっと続きが読みたくなり、まだ日本語訳が出ていない第四巻（『Harry Potter and the Goblet of Fire（ハリー・ポッターと火の杯）』。ものすごく分厚い！）を大学の行き帰りのバスの中で、ポツポツながらも楽しく読んでいます。みなさんお元気で。

（新潟大学教育人間科学部）